

「危険な関係」における人間像

一、序

「危険な関係」についてこれまで何らかの光をあてた発言が、ボードレールをはじめとして、ジロドゥ、ジッド、マルローといった実作者からなされているのは興味深い。

その中で、マルローは、メルトイユ夫人とヴァルモンを、行動がイデオロギーによって規制された最初の小説上の人間像として認めた。マルローは、このような人間像の後継者として、ジュリアン・ソレルやラスコリニコフを挙げる。この論は、フィクティブな人間像の創造を重視し、「危険な関係」をスタンダールの直前に位置づける点で興味深い。

このようにラクロを文学史の上に位置づけたマルローは一方、この作品の中に当時の風俗のリアリスチックな描写を認めようとすることには反対し、二人の主人公にも、神話的性格を強調する。

本論文では、マルローの挙げた人間像創造においてラクロのなし

天 羽 均

た仕事に注目しつつ、一七八二年という日付と、当時この作品のひきおこしたスキヤンダル、反響の意味をその人間像と重ねあわせようと試みるものである。

人間像の特徴と、革命前夜にサロンにおいてスキヤンダルをひきおこした要素について考えてみる。

一、既存道徳（ヴォランジュ夫人に代表される）や、美德（ツールヴェル夫人）に対してメルトイユとヴァルモンのあびせた痛罵。

二、この二人が悪徳の立場からそれをなしたこと。

三、メルトイユ夫人、ヴァルモンの行為の一つ一つは、当時のサロンの人々には、見おぼえのある自らの姿に他ならなかった。（現実暴露）

四、しかも二人の主人公たちの行為は、偶然や、気まぐれではなくはつきりとした主義—行動原理をもったものであった。

当時の人々からもれた非難の多くは、リコボニー夫人によって代表されるもので、このような人間は存在しない、というものであつ

た。メルトイユ夫人、ヴァルモンの一つ一つの行為には、否応なしに自分たちの姿を見せられた彼らだが、それが一つのシステムを持つてあらわれたとき、認知を拒んだ。貴族社会の外に在るものには容易に見てとれたこの怪物が、その中に在る彼らにはわからなかった。つまりわからうとしなかった。また、彼らは、ラクロが二人の主人公に与えた破滅によって安心したりするほどおひとよしではなかった。

右に挙げた四つの要素を一つのタプロオに組合せてみるなら、自分たちの気まぐれ、なぐさみであるはずの悪が、システムを持ち、自分たちの維持しようとしている道徳を破壊する——これは自滅以外の何物でもない。

当時の人々は、ラクロの人物の行動の一つ一つにあらわされた、貴族社会のサロンの内幕の暴露をおそれたというより、メルトイユ夫人に最もはつきり見られる主義——行動をつなぎ得る人間像にあらわにされた現実の告発をおそれたのではないだろうか。

(註) 単なる内情暴露の書が、当時他になかったとは考えられえない。

このような観点から、主人公たちの人間像を構成する主義と行動について検討し、この人間像の意味を考えたい。

二、メルトイユ侯爵夫人

「男と対等な相手として生まれながら、男の奴隷となりはてたの

は何故か。このような惨めな状態におちいりながらも、この有様に満足し、はてはそれがあなたの方の生来の状態であると考えるまでにいたったのは何故か。

自由で尊い人間の苦難にみちた美徳を捨て、卑しいが安楽ではある悪徳を選ぶにいたったのは何故か。もしこのような忠実にうつされたタプロオもあなたの方の冷静な心を動かすことがなく、あなた方はそれを何の感動もなく眺めることができ、愚劣な日常に帰っていくとするならば、それは『悪徳が習慣となるとき、不幸は救い難いものになる』(セネカ)ということだ。しかし、もしあなたの方の不幸と敗北の物語を聞いて、あなたの方が屈辱と怒に顔をあからめるなら、憤怒の涙があなたの目からこぼれるなら、女性もはや偽りの約束に欺かれてはならない。女性の不幸を作りだした男たちの助けを期待してはならない。男たちは、女性の不幸に結末をつける意志も能力も持っていない。」(女性教育論)

ラクロが小説のすぐ後に書いた「女性教育論」の一節であるが、「危険な関係」の根底にあるのも、このような現社会におけるゆがめられた人間関係に他ならない。フランス革命のイメージを構成するには少し早かった十八世紀末の一時期において、特に自ら革命的エネルギーをもたぬ貴族社会においては、当時のゆがんだ人間関係は、男女間の関係のひずみとして捉えられることが少なくなかった。(当時における好色本の流行。サドに見られる男女関係など)メルトイユ夫人の認識の根本をなしているのも、このような意味での両性間の関係のゆがみである。

「色道の通用語でいえば、交すきずな、これは実際男だけが勝手

に緊めたり断ち切ったりすることができのです」(八一信)「不運な女がまず鎖の重みを感じ出して逃れようとしたり、鎖をそつと持ち上げようとしてさえ、どんな恐ろしい危険にあうか分りません。」

(八一信)

メルトイユ夫人は男女間のゆがみを戦争状態としてとらえる。男女間の現状——暴君と奴隷。彼女の目標——関係の逆転、男を「(私の)奴隷となった廢位の暴君」とすること。目指すのが関係の逆転であつて、ゆがんだ関係そのものを解消することではないため、復讐という形をとる。

a. 主義

「女性の為に復讐し男性を征服する為に生れた私が、前代未聞の新手段を創案し得た。」(八一信)

どのような考察から彼女の主義とよばれるものが生まれたか。

一、男女間の勝負におけるハンディキャップ。ゴールにおいて与えられるものが不公平な勝負。「女の幸運は敗けないこと、男の幸運は勝たないことです。」

二、才能の必要性におけるハンディキャップ。男にとつてはなくてもすませられる才能。女にとつては絶えず用いていなければならぬ。

三、両性間の何らかの関係が成立したのちも、それを支配できるのは男性である。

ここから、戦に勝つための主義——行動原理の必要が自覚される。

「あえて自分の(主義)と申しました。それには相当のわけがあ

ります。それは外の女達の主義のように、偶然に与えられ、吟味もせずに受け入れ、ずるずるべつたり守ってきたものではなく、深い思案の結果なのです。私はその主義を創造したのです。そして私という人間は私自身の造り上げたものだといえるのです。」(八一信)

奴隷という与えられた立場を拒む強い自我の主張が、深い考察によつて勝利への実践方法を得ようとする。現在の暴君をふるえ上らせるには充分だったろう。実力のない暴君ならなおのこと。サロンのでスキャンダル。

b. 主義——行動原理の形成

メルトイユ夫人は、八一信において主義と行動原理について詳しく自伝的叙述をしている。本節の目的は、その簡単な整理と、特色の指摘である。

(一) 主義形成の場——社交界。社交界で人が隠したがる話の蒐集。このような隠されたものの追求によつて生まれる彼女の行動は、現実暴露の強い色彩を帯びることになる。

(二) 行動原理の形成にあつての基本的方——観察と思索。この方法を支えていたのは、知的好奇心。「楽しむことは望まず、ただ知ることを欲して」いたし、「学ぼうという欲求が、その手段を教えてくれたのです」。メルトイユにとつては、結婚の初夜も経験の一機会にすぎなかつた。(cf ラミエル「何だあの有名な恋愛というのもこれだけのことなんだわ」)

第一に学んだことは、自己を表にださぬこと。はじめは自分が観

察していることを気取られぬためにとつたこの方法が、やがては、行動原理としても最も重要なものとなる。

観察と思索は、二つの側面によって特徴づけられる。

イ、身体的側面——顔つきを思いのままにする力。視線を自由に動かすこと。——表情をも統御すること。自分の實際に感じている感情をこらし、表情を自由に支配しようとする心遣いは、やがて動作、言葉をも自由にあやつれるようにする。「こうなると私のものの考え方はただ私だけのものとなり、外へ示して利益になる考え方しか表わさないことになりました。」

これらは全て、観察のための必要から生まれて行動にいたっている。この行動手段は、再び積極的な観察の手がかりを与えてくれる。他人の顔の表情や、その表情のあらわすものを一目で見抜くようになる。

このような観察手段と実践手段の一致は、行動するものの視点であり、ラクローがモラリストの観察に加えた新しい点であろう。ヴォランジュ夫人、ロズモンド夫人の静止した視点が、メルトイユ夫人、ヴァルモンによって裏切られるのは、この間の事情を示している。

観察方法から生まれた行動の身体的側面の重視は、作品全般の大きな特徴をなしている。

ロ、精神的（知的）側面——前項でみた観察のうらうちをしたのが読書である。彼女は小説に風俗を、哲学に世の意見を、厳格なモラリストの書に彼らが世に欲求しているものを学んだ。この作品中でも、しばしば「新エロイズ」や、クレビヨン・フィス、ラ・フ

オンテース、「クワリス」の名が登場する。

(三) 行動原理の直接目指すもの——「何をなし得るか、何を考へべきか、如何によそおうべきか」という三点を挙げている。これを実践するのに必要なものは、彼女によれば、「創作家の才と役者の腕」である。このことから明らかなように、メルトイユ夫人の目ざしたものは、「……のふりをする」と即ち演技であり、自己の能力の最大限を発揮する手段の獲得であった。この三つの原則は、そのままジュリアン・ソレルに再び見出されるものではなからうか。

c. 行動原理の実践

ペルロツシュとの情事一夜（十信）。ダンスニー・セシル関係の画策。はじめからのいきさつを、すっかり読者に裏側から示してくれるブレヴァン事件（八五信）は、彼女の主義について詳しく述べた八一信の直後におかれているだけに、行動原理の実践の華々しい例となっている。

これらはいずれも、彼女の演出を示し、行動原理に徹した演技を示している。ペルロツシュとの一夜および、ブレヴァン事件においては、快楽の瞬間を除いては、あるいは、その瞬間にいたるまで、言葉と身ぶりが完全な演技としてなされる。

しかし、作品中一番複雑なドラマが展開されるのは、ヴァルモンとの関係においてである。メルトイユ夫人の他の画策が全て、彼女のヴァルモン宛の手紙によって明かにされ、種明しの形で提出されているのに対し、ヴァルモンとの関係は、舞台裏ではなく、彼女の舞台姿が示され、二人の緊張した関係は複雑なゆれを見せる。

それぞれに主義をもった二人の奇妙な共犯関係については後にふれるが、二人の主義が互にその立場を主張し、矛盾をあらわにしはじめるとき、共犯者は敵対者となった。もともとゴールでの再会を誓った競争者だったのだ。

、こうして彼女にとっては、社会における全ての人間関係が戦いのうちにあり、戦いにおいては、「いざとなれば私も自分の誇りを賭けることになりましょう。一旦負けぬ気が出るととめどのないものです。」「征服かさなければ破滅です。」

メルトイユ・ヴァルモン関係において、一四一信でメルトイユ夫人がヴァルモンにツールヴェル夫人への絶縁状を送ってから、まだツールヴェル夫人に未練を残すヴァルモンを、ダンスニーとの関係で誘発にかり、宣戦布告にいたる行動、さらに、急転直下ダンスニー・ヴァルモンの決斗へと導く行動は、ヴァルモンの心理をつかんだ無駄のない攻撃と迅速さを充分に示している。

観察と思索は、心理の動きを捉え、同じく観察と思索によつて支えられた行動原理は、適確に実践される。ここでは、メルトイユ夫人が冷静な観察と思索に支えられた行動者であると共に、勝利か破滅かの戦いを自らに課した人物であることを注意しておきたい。

d. 女性論および恋愛論

メルトイユ夫人の主義と行動は、男女両性間のゆがめられた人間関係に基づくものであるが、この人間関係のひずみを特徴的にあらわしているのは、彼女の女性論、恋愛論であろう。しかもこれらの見方は、ラクロの「女性教育論」の中に見られる意見と複雑な表裏

関係をなしている。「女性の為に復讐し、男性を征服するために生まれた」メルトイユ夫人が、同性であるセシルを犠牲にし、ツールヴェル夫人を破滅に追いこむ行動を検討してみよう。

(一) 女性論 社会における男女関係では、暴君・奴隸以外の関係しかないことを知るメルトイユは、このような認識をもたぬ女性「有頂天になる女、いわゆる情の女(…)そういう女のはげしい空想を見てみると、生れつき感覚がみんな頭へ上っているのだと思えません。」と述べ、つづけて「思索ということをしことがないのでもまだその恋に心とらわれ(…)自分の弱身を相手に打明けることも恐れぬ女、つまり現在の恋人が将来の敵であることに気がつかない浅はか者です」と容赦しない。

セシルに対する評価はこのような考え方から生まれる。セシルについては、右に見たような社交界の女性にはない純真さをかなりみとめているとはいえ、くだらぬ初心さである。ほとんど治りつこない、何につけても邪魔になるいくぢなさ、せいぜいながき易い女にしかない。「そういう女は全く快楽を与える機械に過ぎないのです。」無防備でいること、性格の弱さ、快楽におぼれることは、メルトイユ夫人の性格や主義とは全く逆のものである。

もともとジェルクルへの復讐に端を発したセシルの誘惑計画だが、セシルはメルトイユ夫人のエゴイズムの犠牲として選ばれただけではなく、自らをやすやすと敵にひきわたす女性としていけにえにされる。

「力によるにしろ、説得によるにしろ、最初に屈した女性が、女

性全体の鎖をつくりだすことになった。」（「女性教育論」十章）

（二）恋愛論Ⅱ 快樂論

快樂に溺れる女性を攻撃したからといって、決して快樂を蔑視しているのではなく、むしろ快樂こそ唯一可能な他との關係であると言え見ている。メルトイユ夫人にとっては恋の楽しみとは「自分をすっかり委せ切る気持、はげしさに喜びすら清められるあの狂わしい逸樂」であり「快樂の原因であると言われる愛は口実に過ぎない。」快樂による結合を特定の二人の持続的關係にしようとする恋愛はメルトイユ夫人によって否定される。

この考え方は、ラクロが「女性教育論」で述べているものと極めて近い。「女性教育論」では、ラクロは、自然状態において特定の人間の持続的關係、家族の構成を認めない。男女両性は自然の健康な本能と欲求によって結合し、それが満されると、彼らをさらにその上一つの關係にしばりつけておくいかなる必然性も認めない。

ラクロが愛情として重視するのは母子間の自然な愛情であるが、これとても子供が保護を必要としない年令に達すると、その結合がなおも続くとは考えない。まして、父が子に対しての關係に結びつけられているとは到底考えられず、配偶者同志を持続的關係に結びつけておくのは社会の諸制度の産物に他ならぬという。

このような論は、自然状態そのものの検討の不充分さによって随分暴論のようにも見える。しかし、当時、自然状態はつねに革命前のアンシャン・レジームにおける社会に対立するヴィジョンとして提出されたことを想起したい。ラクロでも、右に見た夫婦關係、あるいは家族制度の否定は、父―家族―君主―帝國と組みたてられた

当時の理論に対立するものとしてであったことにその意義を求めねばならぬだろう。だから、快樂による自然の結合こそ、感覚によって人間の確かめうる錯覚することのない唯一の結合として重視された。

「危険な關係」にみられる快樂は、ラクロが人間の自然状態において行動原理としたものとは異なりあくまでゆがめられた社会の産物である。メルトイユ夫人が快樂の追求者であったことはラクロの考えた自然状態における恋愛否定に支えられながら、全く裏返しに社会的行動として理解される。

メルトイユ夫人自身、感覚においては敏感な女性だった。^{インテリゲン}「多感である故にこそ夫の眼には却って冷静に見せようと決意しました。」快樂に溺れる女性が、快樂追求者があるメルトイユ夫人によって嘲笑されるという關係は社会状態のゆがんだ必然としてみられる。

夫婦關係についても、メルトイユ夫人は、恋の狂わしい逸樂について述べた後「どんなにしばりした夫婦の差し向いでも、所詮二人はばらばらなのです。」（五信）

このような夫婦關係についての意見を反映するかのよう、ツールヴェル夫人の手紙の中では、夫への愛情、心遣い、即ち夫婦關係が、ヴァルモンの愛情を拒む理由としてはほとんど説得力をもたない。

当時の貴族社会において、夫婦關係がいかに形骸化したものであったか、財産、身分の形式上の結合にすぎなかったかを考えれば、夫婦愛を徳として数えたことの偽瞞性を攻撃したラクロの立場および、それをうらから笑ったメルトイユ夫人の立場が理解されよう。

ラクロの恋愛論Ⅱ 快樂論は、現実における男女間の關係の理想的

姿として描かれたというよりは、現状の虚偽の關係に對して、それの否定というかたちで提出されたものだということに注意したい。これは彼が小説の中でもついに男女の理想的な結合の姿を提出し得なかつたこととも無關係ではない。

ラクロは、偽瞞に満ちた社會における人間關係の中での精神的結合（愛）といった言葉の含み得る虚偽を見抜き断罪した。「愛は社會の慰め手である。社會にある人間（オム・ソシアル）は自然にける人間（オム・ナチュレル）がもつていた全てのものを愛を得るために売り払つてしまつた」（「女性教育論」）。

確かなものは、感覺であり、自らの体によつて確証をもつことだつた。感覺が、自然狀態とはほど遠い現實にあつて存在証明となるためには、偶然に与えられたり、おぼれてしまつたりするものであることはならなかつた。このような点に基づいて、衝動や欲情に動かされることなく、自分自身にとつて、最も確かなものによつて自身の選択・行動を行なつていくという新しいタイプの人間像が、快樂追求者メルトイユ夫人という倒錯したかたちで体现される。

メルトイユ夫人の行動はこのようにして、ラクロの思想の一つのネガとなり、その故にわれわれはこの小説人物のうちに作者を求めゝる契機を得ることができる。

メルトイユ夫人の行動原理に新たに對立するものとしてヴァルモン・ツールヴェル關係が表われる。

タルトイユ夫人は、ヴァルモンの「愛」を彼女の検査台にのせる。一、ヴァルモンが何ととりつくるおうと、彼のツールヴェル夫人への感情が愛と呼ばれるものであることを見逃さなかつた。二、

その愛が強い力でヴァルモンを捉えているとするなら、愛はヴァルモンによつて守りぬかれ新たな価値となるだらうか。

一三一信においてメルトイユ夫人はヴァルモンに次のような提案をする。「二人の悪者が賭博をしているうちにお互の正体が分かつたので『双方から手を引いて、札は半分づつ払うとしよう』といつて勝負を止めたという話は御存知でしょう。この賢明な手本にならおうではありませんか。勝負では、勝利が破滅しか道はない、と言つていた彼女の発言としては、何か無氣味なものを含んでいる。ヴァルモンにとつては、この提案に色氣を示せば、彼が恋のとりこになつたという証拠となり、勝負においては破れる。この提案を一蹴すれば、それはツールヴェル夫人を捨ててを意味する、という二重に苦しい立場に追いこまれるわけで、非常に巧みな提案であつた。しかし、メルトイユ夫人としても、この提案はぎりぎりの地点からなされている。たしかにここでは、二人の關係、それぞ

れの行動原理はもう一つの可能性に向ひあつていた。結果は彼女の予言のとおり、ヴァルモンの愛は、彼の虚榮心と輕挙によつて見捨てられるものだつた。が、この勝利を單純にメルトイユ夫人の「愛」に對する勝利と見ることはできない。「私はあの女に勝つたのではなく、あなたに勝つたのです。それが愉快なのです。」（一四五信）彼女が破滅させ得たのはヴァルモンであり、自らの輕

挙によつて女性の不幸をつくりだす男性であつた。「あなたもサルタンのように、女の友でも恋人でもなくつねにその暴君であるか奴隸なのです。」（この章の冒頭に引用した女性論の一節の最後を思い出して頂きたい。）

「愛」は価値あるものであるとしても、力を持たぬ限り意味を持ち得ない。ゆがんだ人間関係を回復するためには無力であることが証明された。価値は全て力でなければならぬ。

だが、ヴァルモンをして自らの破滅の後も、ツールヴェル夫人を病床にまで求めさせた「愛への希求」をほうむり去ることはできなかった。ゆがんだ社会における「愛の希求」こそ失われたものの回復への今一つの願ひであり、その勝利にもかかわらずメルトイユ夫人を破滅へまで追いこんだのも、この願ひの烈しさではなかったらうか。ヴァルモンにとって「愛」とはどのようなものであったかを次章において検討したい。

三、ヴァルモン子爵

「多くの女にとっては快楽は常に快楽で、決してそれ以外のものではありません。そういう女にかかつては、どんな立派な肩書がついていても、男は何のことはない飛脚かただの走り使い、働けばそれが取柄で、一番よけいに仕事をする者が一番偉いと相場がきまっています。」

第二の手合はどうかというと、これは当今恐らく一番数が多いのですが、恋人の名声、競争者からその恋人を奪った得意さ、今度は自分が取られはしまいかという心配、おおよそこういうことばかり考えているのです。そういう女達の感じるような幸福の中には、なるほど我々男も幾分あずからしてもらっている訳です。しかし、その幸福は、相手よりも寧ろその場の情況次第なのです。幸福は我々を通じて来るもので、我々から来るものではないのです。」(二三)

三信)

ヴァルモンにとつても、男女関係にあらわされる社会における人間関係は、このように人格とはかかわりのないものであった。この社会における自己の主張、人間性の回復がヴァルモンの叫びだった。

すでに社会的な役割、意味を失なった貴族社会にあつては、その枠内にとどまる限り、人間性の回復の願ひは不可能であり、自己の主張は、放縦、虚栄心と化すよりなかった。ヴァルモンとメルトイユ夫人の求めるものは、同じくゆがめられた人間関係の中で勝利者となることであり、ゆがんだ人間関係そのものの廃止ではなかった。男性と女性という立場の相違により、その主義と行動には、かなり異なる、最後には敵対者とならざるを得ない面がでてくる。

a. 主義

「幼いときから一言一行すべて計画なしに動いたことはなく(…)彼の所行は主義から来たものでございます」(九信)とヴォランジュ夫人はヴァルモンのことを述べている。

しかし、ヴァルモンの主義は、メルトイユ夫人のようなはつきりとした方法に裏づけられているとも、行動原理を持つているようにも見えない。弱者である女性が、男性と同等に、さらには優位に立つためには、当然メルトイユ夫人のような、明確な主義と、行動原理形成のための厳格な方法が要求されたが、ヴァルモンの位置は、もともと強者の位置であつたのだ。

だが、この強者の位置も、ヴァルモンにとつては、人間としての

意味を確かめ得るものではなかった。彼にとっては、栄冠が、全て自分の内なる力によることを証することこそ、彼の存在証明となるものであった。「征服、それが我々の運命なのです。」

b. 行動原理

基本的な考え方——困難、障害の征服こそ与えられる栄冠を輝やかしいものにする。

何の経験もなく、何も知らぬ娘、いわば何の防禦もなく身をまかせる娘……恋よりも好奇心に動かされるような娘であるセシルよりは、信仰と、夫婦のきずな、厳格に身を持つること、社会の偏見などにとらわれたツールヴェル夫人こそ、彼に快楽と栄光を約束する。

それは単に一人の女性をものにするだけではなく、神や徳との競争でもある。「私こそ夫人の選んだ神となるのだ。」（九信）「熱烈な祈り、つづましい願い、恐怖に襲われた諸々の衆生が神に向って捧げるすべてのものを、彼女から受けるのは即ちこの私なのです。」（九六信）

ここから、女性に自分の払う犠牲の一つ一つを充分に感じさせ、苦惱と悔恨のうちに、欲望をかくすことができぬまでになり、身を委せるようにさせる、という彼の行動原理がでてくる。これは「そんなに長い間待つ辛抱はありません。御承知の通り一度こうと肚をきめたら待たせないのが私の主義です」というメルトイユ夫人とは対照的である。勝利を長びかせることは、戦果をより尊いものと思わせるが、敗北を長びかせることは、敗北の一つ一つに押しつぶさ

れていくことである。このような原理は、くり返し述べられる。

「我が軍門に降るはよいが、戦わせたい。我を克服する力がなければ、抵抗力を得させたい。己が弱きを味得させ、せつばつまって兜をぬがせたい。中原の鹿をだましうちにするのは卑しき密猟者の業、真の獵人たらんものは、須く、鹿を手捕りにしなければならぬ。」（二三信）

ヴァルモンは、得られる勝利を全く自分に帰するために、困難と障害を選ぶ。だがこれは、所謂、強者の虚栄心、口実にすぎず、そこに厳格な方法を求めるべくもない。

c. 計画の実行

セシルの誘惑とツールヴェル夫人を得ること。「あなたは女性の武器を巧みに操り、奸策を弄してお勝ちになりました。しかるにこの私は、男性にその絶対不変の権利をとり戻し、威力によって服従せしめたのです。」（九六信）セシルの誘惑での策略は、彼の言う通り、機会を得るために努力しただけで、強者の位置を利用するだけでこと足りた。ただし、セシルの反省——拒絶にあえば、たちまちメルトイユ夫人の援護射撃を必要とするほどの無策ぶり。セシルに求めたもの——肉体の快楽。若さ、ういういしさ、魅力ある享楽。これらは彼の今までの快楽遍歴で出会わなかったもので、ツールヴェル夫人との関係が行き悩むときに求めたこの関係は、ヴァルモンの立場——男性の立場の身勝手さをも示している。

ツールヴェル夫人——知られざる魅力。この意味については次項で検討するが、ヴァルモンの彼女の愛を得るための行動原理の実践

という点から見れば、これは彼の作戦をもってしても陥落しない女性、こんな女性をはじめてだということにも通じる。困難と障害を克服するという行動原理は、方法をもたず、現実の状況を見る観察眼を欠き、一度ならず途方にくれる。

愛の機会を目前に、ツールヴェル夫人が突然バリへ出立したとき、「いよいよ女というものには匙を投げなければなりません(…)私はこれ程までに辱められるべきであつたのでしうか。しかも相手は何者でしょう。臆病な女、戦の稽古を積んだこともない女です。」(一〇〇信)という破目になる。

このことが更にヴァルモンのツールヴェル夫人への気持をかきたてる——となれば、メルトイユ夫人に「あなたにふさわしい恋」といわれても抗弁の余地がないようにすら見える。

長期作戦は、彼の原理でもあつたが、彼の甘さの口実でもあつた。この点をメルトイユ夫人は見逃さなかつた。一四一信に託されたツールヴェル夫人への手紙をそのまま発送してしまふことにより、ヴァルモンは自ら墓穴をほつた。「それほど計画の才能がありながら、実行の才がなく、ただ一つの浅はかな行為のために、喉から手の出る程ほしい物の前に、乗越えられない障害を自分でお作りになったのですから惜しいものです。」(一四五信)

d. ヴァルモンの愛

ヴァルモンの男女間の関係についての見方も、ラクロの「女性教育論」と密接な関係をもつ。「女に握らせたと思せかける偽りの權威は、女の一番避けがたい筈だと信じているからです。」(四〇

信)これはそのまま、ラクロの女性たちへの忠告である。

男性という王者——暴君の位置にあつて、自分の肩書とか、自分をとりまく状況によつてのみ関係が成立していることをヴァルモンが見逃してはいなかつたことを、我々はこの章のはじめで見た。快樂のうちですら、自己の存在証明を得られない。「由緒ある家名と莫大な資産と人に好かれる数々の性質を備えたヴァルモンは、社交界に覇を唱えるに、世辭と揶揄とを巧みに使いわければ足りることを、夙に悟つてしまいました。この両刀使いの術にかけては、彼の右に出る者はありません。彼は世辭でたらしめて揶揄でおどすのです。人は彼を尊敬するのではなく、彼にへつらうのです。勇敢というよりは寧ろ用心深い為に、彼にたてつくよりは触らぬ神にたたりなしと考へているような社会の中で、彼ヴァルモンはざつとそういう生活を送っているのです。」(三十二信)これは、そういった社会の住人の一人であるヴォランジュ夫人のモラリスティックな適確な指摘である。ただ彼女は、ヴァルモンを非難しているつもりなので、自分たちの社会を非難することになるのだとは夢にも思っていない。ヴァルモンの使命とする征服の内幕は、このようなもので、そこには孤独な征服者の榮冠が用意されてあるばかりだつた。ヴァルモンには恋とは錯覚であり、現実には、サルタンと後宮の女たちという空しい関係があるだけだつた。

このようなヴァルモンにとつて、メルトイユ夫人との関係こそ、征服の榮冠に意味を与える唯一の場と考えられた。二人はこの書簡集のはじまる一、二ヶ月前にメルトイユ夫人がたわむれに「永劫の別れの誓い」(一〇信)と呼んだ最後の関係以来、それぞれ快樂探

求の途につく。自らがもはや楽しまなくなったとき、互にいけにえを捧げあうことに意味を求める。「永劫の別れ」とは「永遠の愛」を皮肉つたものであろう。メルトイユ夫人にとつて、特定の二人の排他的持続関係は認められないから、快楽の瞬間に幸福を感じたヴァルモンとの関係も、快楽の要求する以上につづけられるものではなかった。

こうして二人は、恋という愚かしい関係にとらわれることなく快楽を楽しみ、社会を嘲笑しようとする。お互に捧げあつたいけにえを前に、ゴールで再び快楽を燃え上らそうという奇妙なゲームは、はじめられたのだ。

快楽と征服が何と与え得ず、その意味づけを、メルトイユ夫人との共犯関係に求めたとき出あつたのが、ツールヴェル夫人であり、それは彼に別の新しい可能性をひらく関係であつた。

「夫人は世の運葉な女たちのように、時に惑わせ常にあざむくあの偽りの眼を持つてはいません。言葉の切れ目をつくり笑いでつなぐこともできず（…）自分の夫にまで情愛を及ぼし、留守がちの人をいつも変らず愛するには何と驚くべき情愛が必要でしょう。」（六信）「実は今まで私は自分の心がなえ切つてしまったものと信じていました。自分にはもう官能しか残つていないのを知つて、うたた早老をかこつていたのでした。ツールヴェル夫人は青春の楽しい幻を返してくれたのです。夫人と共にいるときには享楽しないで幸福になれるのです。」（六信）

「欲するものを得ないでは生きられず、その為には時も快楽も生命も犠牲にする、それが恋なら私は真正正銘恋しているのです。」

（一五信）

失なわれた青春の回復、快楽以外の価値への希求は、ヴァルモンがメルトイユ夫人に求めたのとは異なつた次元での自己の主張、願ひとなつてゐる。

われわれが今引用したのは、ツールヴェル夫人との関係の段階から言えば、ごく初期のものばかりであることに注意しよう。ヴァルモンが、実際にツールヴェル夫人を愛しはじめたとき、彼はそれを隠そうとするのだ。とすれば、このはじめの手紙にあらわれた「恋」とは、ヴァルモンにとつて、メルトイユ夫人への誇示、一つの理想像であると見るのが正しいだろう。

ツールヴェル夫人との関係には、つねにヴァルモンのこの理想像追求という夢がはいりこんで来る。ツールヴェル夫人が自ら身を委せるまで待つ、というのは彼の行動原理であると共に口実であることを既に述べたが、これまでのような征服ではなくて、彼女が、自分を愛してくれることによる関係であることを願う気持がはいりこんでいたはずである。快楽と征服に疲れたヴァルモンは、恋を恋していた。ツールヴェル夫人あての手紙は彼の恋の演技であるが、単に彼女を誘惑するためだけの策略であつたのだろうか。

やがてヴァルモンは、現実と演技の区別がつかなくなる。これは彼がツールヴェル夫人に手紙を書かなくなつたときで、九九、一〇〇信は、ヴァルモンのそのような転機をあらわしている。

（註）

ヴァルモンは九一信を最後に、一三一信のエミリーとのオペラ座事件の弁解と、メルトイユ夫人の絶縁状のうつしの

ほかは、ツールヴェル夫人宛に手紙を書かない。ツールヴェル夫人の九〇信がうら返しの愛の告白であることにも注意したい。

ヴァルモンは、自らに長期作戦を行動原理として課し、恋の演技をしたが、予期以上に困難が重なるにつれ、みずからの作戦と演技のとりこになつてしまった。

このような演技が現実と同化し得たのは、二人の關係の成立したときであつた。このときからヴァルモンは、メルトイユ夫人に対してのみ演技をつづけねばならなくなる。ツールヴェル夫人との感動的な愛の情景をメルトイユ夫人に告げる一二五信にみられるいくつかの矛盾は、この事情を示している。

「たとえ昨日の濡れ場で予定よりどうやらすこし深入りするようなことになる、相手に起させた錯乱と陶酔をしばらく共にしたにしても、この一時的な迷いの雲は今頃はきれいに晴れている筈です。ところが、今もなお同じ魅力が残っているのです。（中略）」

これは悪戦苦闘によつてかち得、巧妙な駆引によつて決せられた完全な勝利なのです。：勝利の時に感じ、今もお感じしている余分の喜びは、勝ち誇つた快感に他ならないのです。私はこういう見方を好ましく思います。服従させた奴隷に自分が何等かの方法で左右されるとか、充ち足りた幸福が必ずしも自分の心にあるのではなく、その幸福を最も強く享樂させる力は、他のすべての女を除いて、ある特定の女に限られているとか考へるその屈辱から、上のような見方は私を救つてくれるからです。……私は今度の關係を楽々と思ひ

のままにいつ何時でも断ち切ることができない程縛られはしないことを断言します。……

かくまで純な気高い卒直さを以て、夫人はその肉体と魅力を私に与え、共に喜びつつ私の幸福を増してくれたのです。私達はお互に申分なく陶酔しました。そして生まれてはじめて、その酔心地が快樂の後まで残つたのです。私は夫人の膝下に跪いて永遠の愛を誓うために、ようやくその腕を離れた位でした。そして正直なところ、私は口でいう通りを心に思つていたので、とにかく別れてからも、夫人のことが忘れられず、努力しなければ考えをそらすことが出来ませんでした。……」（一二五信、傍点筆者）

征服の榮光というこれまでの目標を演技しなければならなくなり、恋というこれまでの演技が現実となつた。この倒錯は、ヴァルモンの内にあつた欲求のあらわれである。（この章の冒頭に引用した文章もこのころの手紙である。）

メルトイユ夫人はヴァルモンのこの変化を知り、前章に述べた一二三信の提案となつた。これに対するヴァルモンの恋のアポロジーは、そのまま彼の恋をあらわす。

「私は、一途に恋をするような、そしてその恋の中にも恋人以外のことは考えないような、感情の細やかに深い女を、觀察の用に供するために、発見する必要があつたのです。それは情熱がありふれた道なぞはたどらずに、いつも真心から出て感覚に達するような女です。例えば（……）快樂の果てに泣きぬれながら、しかも魂にしっかりとたえる言葉をきくと、すぐまたもとの逸樂にかへる、まづそういう女です。またその上に、心の中のどんな感情でも包むこと

の出来ない、そしてそれが習慣になつてどうにもならない、生まれつきの卒直さを兼ね備えている必要があります。ところでこういう女は、あなたも認めて下さるでしょうが、めったにあるものではありません。ツールヴェル夫人に遇わなかったら、恐らく一生涯出合うことはなかったらうと思うのです。」(一三三信)

「必要があつたのです」とくり返されていることから明かなように、ヴァルモンは彼の理想像をツールヴェル夫人にあてはめたのだ。彼の理想は恋人としての人格の重視、感覚と卒直さの重視によつて特徴づけられる。

現実のツールヴェル夫人像について詳しく述べる紙数はもはやないが、彼女自身の手紙に表われた愛と徳との相剋に悩む人間像は十八世紀文学の人間像としては、メルトイユ—ヴァルモンに見られるほどの新しさも特徴も見出せない。彼女の人間像としての魅力は、ヴァルモンの描く理想像のうちにとどまつて、現実の人間像として結晶するにはいたらなかった。ラクロの抱いていた女性の理想像、自然の女性が、現実のツールヴェル夫人像といかに異なるかは、西川論文において指摘されたとおりである。ジュリアン・ソレルに対するレナール夫人像を待つてはじめて、われわれはヴィヴィッドな現実の女性像への結晶を見ることが出来る。

メルトイユ夫人も、この点をたくみにつく。

「あの類い稀なる驚くべきツールヴェル夫人を、ただの女、ただあるが儘の女と考えて頂きたいのです。ということは、うつかり欺されてはいけません。他人にあると思う魅力は実は我々自身の中にあるので、それほど相手を美化するものは恋以外にないのです。」

(一三四信)

ヴァルモンの愛が彼の現実に対してついに力をもち得なかったのも、ヴァルモンが自分でつくりあげたツールヴェル夫人像が、メルトイユ夫人という現実の強烈な人間像に對抗できなかったからに他ならない。

ヴァルモンの「愛」、それは、現実社会の快楽と征服に疲れたものがかいま見た人間性回復の可能性の幻影であつた。もう一度ラクロの言葉を思い出そう。「愛は社会の慰め手。」

四、メルトイユ夫人とヴァルモン

「危険な関係」は、メルトイユ—ヴァルモンという関係に、ツールヴェル夫人がはいりこむことによつておこるドラマである。ツールヴェル夫人が前章で見たように、ヴァルモンの心の中に育てられた人間像という面が強いとすれば、メルトイユ夫人の現実への反抗と、ヴァルモンの現実から逃避という、現実に対する二つの態度の間のドラマである。二人の共通の基盤は、ゆがめられた人間関係の支配する現実であり、二人の否定的人間像が現実の告発としての意味をもつものここから来る。二人はたくみに現実の悪徳を利用し、現実破壊の欲求によつて共犯関係にはいる。最も危険な関係といわねばならない。

二人の立場の相違から、より厳しい現実認識を迫られるのは、女性という弱者の立場にあるメルトイユ夫人である。悲劇はメルトイユ夫人の側にある。

ヴァルモンは、心をツールヴェル夫人に、肉体をセシルに、とい

う都合のいい立場にいた。現実には不満だとしても、暴君の立場は、つねに奴隷の立場より保守的である。

二人の関係でイニシアチブをとつたのはメルトイユ夫人だ、とはよく言われることである。だが実際は、彼女のイニシアチブは全てヴァルモンの行動によつて規制されていた。ヴァルモンは愚かにも自ら破滅してしまつたとさへ言える。

狙いをあやまたずヴァルモンを刺した針は、メルトイユ夫人自身にとつても破滅の針となるといふ危ういバランスの上にあつた。止まることが倒れることを意味する彼女の行動に要求されるスピードは、一四一信以後、ヴァルモンの敗北にいたる急坂を下るが、彼女自身の破滅のスピード——事実の暴露、敗訴、痘痕——は、このよ

うなバランスのくずれが生じさせる当然の結末であらう。

メルトイユ夫人が痘痕で醜い顔になつたとき、社交界のある夫人が「病気があの人を裏返しにした。今は心が表へ出ている」と言つた。社会はついに、その心が何によつて養われたのかを知らなかつた。メルトイユの顔に表われた醜さが自分たちの姿であるとは知らなかつた。恰度、ヴォランジュ夫人が、娘のセシルが何故修道院へはいつてしまつたのかを知らなかつたように。

五、おわりに

社会の現状では、「良き教育」は望めぬと「女性教育論」で述べたラクロは、メルトイユ夫人に「悪しき教育」を与えるしかなかつた。彼が否定的人間像に貸し与えた現実に出て現実になつた方法（現実——観察——思索——行動——現実）こそは、これまで文学において

知られなかつたものであつた。主義を行動に結びつけることを知つた人間像、彼がそれを砲術に関する技術士官という立場から学びとつたものかを知るには、さらに多くのことが研究されねばならぬだらう。主人公たちが否定的人間像であることについてもラクロの個人的代償行為として、作者が上昇ブルジョワジーの立場から貴族をやつつけたと見たのはロジエ・ヴァイヤンであるし、作者が作中人物に嫉妬していると見たのは、ジロドゥである。いずれも仮説であるし、われわれの提出できるのもいまひとつの仮説にすぎない。

大革命の前夜にあり、その明確なイメージをまだもつてはいたつていない社会の中で、一砲兵士官が現実に着した肯定的人間像を描くためにどれだけの可能性と希望が許されていたであらうか。可能性と希望——活動の場と新しい事態への展望。ラクロのこの時期までの生涯にしても、このようなものを彼自身に約束されていたとは見えない。

彼にわかつていたのは、このような社会が終結しなければならな

いということであつた。（「女性教育論」）

古い舞台に与えられた、あるいは古い舞台しか与えられなかつた新しい人間像は、大きく変ろうとしていた時代のひとつの表われであつた。あらゆる可能性が閉ざされたかに見えたとくに現われたこの人間像は、あらゆる可能性が開花したかに見えて、やがてその幻想が消えさうとするときに生まれたジュリアン・ソレルや、ラミエルの中に、その血族を見出すことになるであらう。（一九六三・一〇）